5　『維摩経』にみる医の心

杉田暉道

先の第一〇二回の本学会において、医の心について歴史的な検討を行った結果を報告したが、その後さらに詳しく検討したので、これについて報告する。

医の心について、もっともはじめに記されている文献は、演者の調べた範囲では『維摩経』であった。この経典は大乗仏教の初期（紀元前一世紀頃～紀元後一世紀頃）に成立した。その内容は、商人として世俗の生活をしている維摩居士のもとに、ブッダの弟子達が空の思想について質問にくるのに対し、見事な解答を行っている様子が述べられている。

さて、本題については、文殊師利問疾品第五に記されている。先ず文殊師利が維摩に病気になった原因について尋ねたところ、「痴と有愛より、則ち我が病生ず。一切衆生病むを以って、是の故に我れ病む。若し一切衆生の病滅せば、則ち我が病も滅せん。所以は何んとなれば、菩薩は衆生の為めの故に生死に入る。生死有らば則ち病有り。若し衆生にして病を離るるを得ば、則ち菩薩も復た病無けん。」と述べ、さらに「己の疾を以て彼の疾を愍み、当に宿生無数劫の苦を識るべし。常に一切衆生を饒益せんことを念ふべし。所修の福を憶ひ、浄命を念じて、憂悩を生ずることなかれ。常に精進を起して、当に医王となりて衆病を療治すべし。菩薩是の如く有疾の菩薩を慰喩して、其をして歓喜せしむべし」と説いている。

この『維摩経』の思想をそのまま継承して医の心を説いたのが、天台大師・智顗（五三八―五九七）によって撰述された『摩訶止観』の第七章第三節「病患を観ぜよ」に述べられている（五）「止観（十乗観法）を修せ」の中の起慈悲心の観法である。

智顗は、われわれが、煩悩になやんでいる心の状態から悟りを得るまでの過程を、煩悩境（煩悩になやむ心の状態）、病患境（生身の人間が病気になった状態）、業相境（過去に行った行為が原因となって出現する身体または精神上の状態）など十境に分けた。ついで十種の境のそれぞれに、

十種の観心（心の状態を観察すること）の方法を考案した。これが十乗観法である。すなわち（1）観不思議境、（2）起慈悲心、（3）巧安止観、（4）破法遍、（5）識通塞、（6）道品調適、（7）対治助道、（8）知次泣、（9）能安忍、（10）無法愛の十法である。

それでは「病患を観ぜよ」の節のなかの「止観（十乗観法）を修せ」において説かれている起慈悲心について述べたい。智顗の説いた起慈悲心とは、現世の迷いをたちきって真実を悟ると、煩悩の中に沈んでいる多くの人々に対して、自分と同じように真実にふれてもらいたいという願望が起きる。そしてこの願望から多くの人々の病気を治し、真実にふれてもらうように努力することを起慈悲心というのである。ここで慈悲心とは、三諦円融（人生は空であり、仮であり、中であるという三つの悟り）の実相に即した慈悲心であり、具体的には、四弘誓願（（1）救わねばならない人々は限りないが、必ず救うことを誓う。（2）断ずべき煩悩はつきることがないが、必ず断滅させることを誓う。（3）教えは量り知ることができないほど多いが、必ず学びつくすことを誓う。（4）仏道はこの上なく高いものであるが、必ず完成させることを誓う。の四つの誓願をいう）をさし、これは医師、看護婦のみでなく患者にもあてはまるものである。

したがって、患者を治療する場合、医師や看護婦が、患者に慈悲を施すというような主体客体の関係にたつ行為をとらない。医師や看護婦は病人と同じ立場にたって、三諦円融の教えに基いて治療や看護を行うのである。

また、患者も三諦円融の教えに基いて、病気を早く治すように努力し、かつ、自分と同じ病気にかかっている人に対しても早く治るように念じなければいけないと説いている。

（神奈川県予防医学協会）